

ペスタロッチーと

幼児教育

鈴木 由美子

一九九六年は、ペスタロッチー生誕二五〇年にあたる。ペスタロッチーが生まれてからこの二五〇年、教育の重要性が叫ばれ、多くの人々が教育改革をおこなってきた。幼児教育史に大きな足跡を残したフレイベルも、そのひとりである。幼児教育に携わる人は誰でも、キンダーガルテンを創設したフレイベルの名を一度は耳にしていることだろう。では、フレイベルの人生に決定的な影響を与えたペスタロッチーとはいえば、幼児教育との関連で思いおこす人は、あまりないのではないだろうか。

フレイベルは、ペスタロッチー主義だったグルーナーの学校で、はじめて教育実践にふれ自己の使命を自覚したといわれる。またフレイベルは、イヴェルドンのペスタロッチー学園で、ペスタロッチーから理論や実践について学んだだけでなく、また直接的に人格的な影響をも受けている。実際ペスタロッチーは、『幼児教育の書簡』のなかで、すべての教育改革の努力は、幼児教育の段階にまで延長されなければならないと述べ、幼児教育

の重要性を指摘している。その意味で、ペスタロッチーの幼児教育思想もまた、今日、幼児教育に携わる人々にぜひ学んで欲しいと思えるだけの内容をもっているといえよう。ここでは、拙著『ペスタロッチー教育学の研究——幼児教育思想の成立』（玉川大学出版部）〈注〉を中心にしながら、ペスタロッチーの幼児教育思想を紹介したいと思う。

ペスタロッチーは一七四六年スイスのチューリヒに生まれ、一八二七年に八二歳で亡くなるまで、スイス革命を経て近代化を模索する時代の波のなかで、波瀾に満ちた生涯をおくった。青年時代にルソーを信奉したペスタロッチーは、「自然にかえれ」とのことばどおり、チューリヒ近郊に農場をもつて農業の近代化に着手した。そのかたわら、一七七四年には孤児や浮浪児を集めて貧民学校を開き、子どもたちが自立できる能力を育成しようとした。これがペスタロッチーの教育実践のはじまりである。一七八一年に刊行した小説『リンハルト

とゲルトルート』がヨーロッパに反響をよび、ペスタロッチーは一躍有名人となった。その彼が、すべての名誉を捨てて本格的に教育活動をはじめたのは、一七九八年十二月、ペスタロッチーが五二歳のときだった。

ペスタロッチーは、五二歳のとき、家族も名誉も、それまで自分が築いてきたすべてのことがらも捨てて、シュタンスに赴いた。ペスタロッチーは、スイス革命によって両親も家も無くし、浮浪児となった子どもたちを収容した孤児院で、自分の体もかえりみずに働いた。彼を駆り立てたのは、子どもたちへの愛であった。ペスタロッチーがシュタンスで、高齢にもかかわらずどれだけ献身的に活動したかは、『シュタンスだより』のなかの次の一節に示されているとおりである。

「わたしは子どもたちとともに泣き、子どもたちとともに笑った。子どもたちは世界も忘れ、シュタンスも忘れて、わたしとともにいたし、わたしも子どもたちとともにいた。子どもたちの食、べ物はわたしの食、べ物であり、子どもたちの飲み物はわたしの飲み物だった。わたしは

何ひとつもたなかった。わたしのまわりには家庭もなく、友もなく、召使いもなかった。わたしにはただ子どもたちだけがあつた。子どもたちが元気なときもわたしは子どもたちのなかにいたが、子どもたちが病気のときもわたしは子どもたちのそばにいた。わたしは子どもたちのなかで寝た。夜はわたしが一番最後に床につき、朝は一番早く起きた。」

スイス革命の戦乱によって両親を失い、孤児となつた子どもたちは、身体的に傷つき病気にさらされていただけでなく、精神的にも人間不信に陥り、自暴自棄になつていた。そうした子どもたちを変えていったのは、ペスタロッチーの献身的な教育愛である。もつともあわれな、見放された子どもたちのうちにさえ存在する人間本性の輝き、それをみつけ、ひきだすのが教育である。その確信がペスタロッチーの教育活動を支えた。ペスタロッチーは慈愛に満ちた父親のように、子どもたちを教え導いた。そうしたペスタロッチーの教育愛によって、春の太陽が雪を溶かすように、子どもたちのすさんだ心

は暖かく包まれ、溶かされていったのである。

ペスタロッチーは、自分のいのちをかけたシユタンスでの教育実践によって、愛のみが愛を育てることを知つた。ここからペスタロッチーは、教育の根源は、母親と子どもとの間で育まれる愛の活動にあることを確信するにいたつたのである。人類が存続する限り、おそらく永遠に変わらないだろう母親と子どもとのかわりあひについて、ペスタロッチーは次のような美しい描写をしている。

「母親はわが子を教育し、守り、喜ばせずにはいられない。母親はどうしてもそうせずにはいられず、またまったく感性的な本能の力を駆り立てられて、そうする。母親はそのようにして子どもの欲求を満たしてやり、子どもにとって不快なものを遠ざけてやり、無力な子どもの手足になって助けてやる。——子どもはめんどろをみてもらい、喜ばせてもらう。こうして子どもの心のなかに、愛の萌芽が成長してくる。

今まで見たこともない対象が目の前に現れると、子ども

もはびっくりし、こわがって泣きだす。母親はわが子を胸にしっかり抱きしめ、あやしてやり、気をまぎらわせてやって、泣きやませる。しかし子どもの目は、まだしばらく涙にぬれたままになっている。そのうちまた、その対象が目の前に現れる。——母親はまたわが子をやさしく抱きしめ、ふたたび笑わせてあげる。こんどは子どもは泣かない。子どもは母親のほほえみに、明るい澄みきった目で応える。——こうして信頼の萌芽が子どもの心のなかに育ってくる。」

よるべない乳児は、母親なしには生存することさえおぼつかない。いのちのすべてを、自分のすべてを母親にゆだねている。そうしたわが子に、わが身を犠牲にして応える母親の愛。それは、子どもからのお返しをいっさい期待しない無償の愛である。こうした母親と子どもとの関係に、教育愛の原型をみいだしたのは、ペスタロッチーの卓見であったといつてよい。これがペスタロッチーの幼児教育思想の原点なのである。

さらにペスタロッチーは、母親と子どもとの関係のな

かから形成される愛の感情を、母親への愛から家族、友人へと拡大し、人類愛にまで発展させようとした。母親と子どもとの関係が、人間の発達における自然的関係であるとすれば、そこから拡大される人間関係は、人類が構成してきた人為的な社会関係である。ペスタロッチーの幼児教育思想の大きな特徴は、社会との関係において、幼児教育の重要性を認識している点にある。では、ペスタロッチーが捉えた社会問題とは、いったいどのようなものだったのだろうか。

十八世紀当時のチュエリとは、大きな社会変動の時代だった。それは政治的にはフランス革命の余波を受けたスイス革命であり、経済的には産業革命とよばれる近代資本主義の進展だった。政治問題については、当時、地方住民が政治的権利の平等を求めて、アンシャン・レジーム（旧体制）に対する戦いをあちこちで起こしていた。一七九八年のスイス革命により、新興中産階層はアンシャン・レジームを打倒し、市民による新しい社会をうちたてた。それがヘルヴェーチア共和国である。

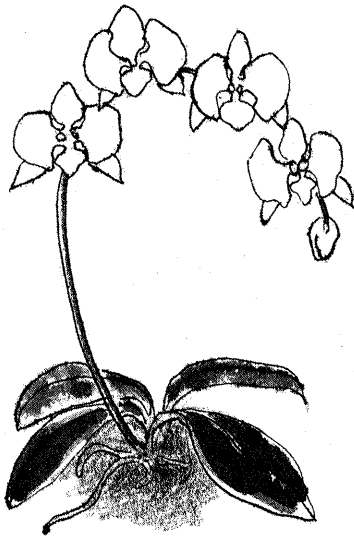
ペスタロッチーは文部大臣シュタップラーの要請を受けて、新しい社会にふさわしい人間の教育をどのようにしたらよいか、また教育者をどのようにして養成したらよいか、ということについて、検討することになった。

ペスタロッチーが出した結論は、新しい社会は、ルソーによって「発見」された個人の尊厳を中心にしたがら、しかも人間同士が愛によって結合する社会であるということだった。ペスタロッチーは、主体的に生きる個人の育成と、そうした個人が結びつく社会とを模索し、社会を構成するひとりひとりの人間の結びつきの原型を、自然的な人間関係、すなわち母親と子どもとの関係に求めたのである。

また一方で、近代資本主義の進展は女性労働の質を変えた。それまで家庭内に限定されていた女性の職業は、家庭外へと拡大された。それにもなつて家庭は大きな変革期を迎えた。核家族の増加である。婦女子の家庭外労働の増加により、それまで家庭が果たしていた教育機能は低下した。とくに重要なのは、母親の家庭外労働の

増加によって、乳幼児の教育を家庭でおこなうことができなくなっていくことである。

こうしたなかでペスタロッチーは、公的な幼児教育施設の必要性をみてとり、幼児教育者養成に着手する。ペ



スタロッチーがいうように、愛は愛によってのみ育成される。とすれば、母親の愛を受けられない子どもたちには愛が育まれないことになる。幼児教育施設の成立基盤は、まさにこの点にあるといつてよい。母親にかわって愛を子どもに育むこと、それが幼児教育施設の目的である。幼児教育者養成は、そのために必要とされたのである。

公的な幼児教育施設としてペスタロッチーが構想したキンダーハウスは、生活の困窮のためにわが子のそばから引き離され、一日中仕事に従事したり、野良に出たり、日雇いに出たりせざるをえない貧しい母親の就学前の子どもたちを一日中世話する施設であった。そこでは幼児教育者として教育された年長の少女が、子どもたちの世話をする。そしてそのための費用は、領主によってまかなわれる。こうした施設の必要性について、ペスタロッチーは『リーンハルトとゲルトルート』（一八一九年）のなかで述べている。そして同年に書かれたグリーブズにあてた『幼児教育の書簡』のなかでは、女子教

育、母親教育ならびに幼児教育者養成の重要性が、繰り返し語られているのである。

とくに注目すべき点は、ペスタロッチーが女子学校を設立し、女子教育、母親教育ならびに幼児教育者の養成に着手したことである。ペスタロッチーは決して、育児を母親の天職としてのみ考えていたのではない。それどころかペスタロッチーは、母親教育の必要性を緊急のものとして認識していたのである。ペスタロッチーは次のように述べている。「次の世代の幸福を深く心にかける人は誰でも、母親たちの教育を最高目的として考える以上のことはなしえない」と。

ペスタロッチーは、愛のみが愛を育てると考え、母親と子どもとの関係を重視した。しかしここでいう愛とは、単なる愛情ではない。前述したように、それは近代市民社会における人間結合の基本である。ペスタロッチーは、この意味での母親の愛を、「思慮ある愛」とよび、単なる愛情と区別している。「思慮ある愛」は、子どもの尊厳を尊重しつつ、しかもそうした子どもひとり

ひとりが他者を認め、愛し合うことができるよう、子どもを育成しうる愛である。そのためにペスタロッチーは、子どもに「自己克服力」を育成することを重視した。

自己克服力もまた、母親と子どもとの関係のなから育まれる。乳飲み子の必要を満たし、献身的に世話をする母親の愛情に対し、子どもの側に「愛し返し」の感情が生まれる。愛による結合を基礎として、「母親に逆らうことはよくないことだ」という予感が生まれ、こうした消極的な自己克服が、次第に積極的な自己克服へと発達し、さらに権利・義務意識へと発達する。ペスタロッチーは、ここに社会結合の基礎をみたのである。

自己克服力を育成するためにもっとも重要なのは、母性愛の質である。すなわち、「母親が自分の愛をできるだけ強く働かせ、しかも自分の行為においては思慮によって愛を調節すること」が必要とされ、母親に「思慮ある愛」が求められるのである。そう考えると、自己克服力の育成は、母親自身が自主的、自立的な存在であってはじめて可能となる。そのために、女子教育、母親教

育が急務であるとされた。またペスタロッチーが、自然に母親にそなわるとされる母性愛にはなく、「思慮ある愛」として形成された母性愛に教育的意味を求めたことは、幼児教育者養成の可能性を導いたのである。

ペスタロッチーが設立したイヴェルドン女子学校での実際が、必要とされた幼児教育者の質を明確に示している。イヴェルドン女子学校でペスタロッチーは、未来の母親を育成するとともに、女性の教師を養成しようとした。女子学校での教育内容は、ドイツ語、フランス語、書写、計算、形・量の直観的学習、図画、歴史の基礎、博物学、地理学、宗教・道徳の学習等であり、理念的にも内容的にも、男子学校と何ら変わりなかった。ペスタロッチーは幼児教育者に、深い知識と教養を求めていたのである。深い知識と教養に基礎づけられた教育愛であってはじめて、子どもの心に「思慮ある愛」を育成できるとペスタロッチーは考えたのである。

このようにペスタロッチーは、自由、平等、博愛にもとづいて形成された近代市民社会の存続のために、幼児

教育ならびに幼児教育者養成を重視した。近代市民社会の存続とは、ベスタロッチーによれば、個人の尊厳とそれにもとづく人間同士の結合の重視である。個人の尊厳は、それを尊重し、お互いに分かり合える、認め合うことのできる人々の間にあってはじめて意味をもつ。そこで幼児教育の課題は、自分の価値を認めながら、しかも自己克服力によって他の人の価値を認めることができる子どもの育成であると同時に、そうした子どもたちが愛によって結合しうるような集団を形成することであるといえよう。これが、ベスタロッチーの幼児教育思想の根幹なのである。

価値観が多様化したといわれるなかで、ひとつの価値だけを追い求めることを強要されているかのような子どもたち。他の人と同じ価値を共有していなければ、アイデンティティを確立できないかのような子どもたち。ベスタロッチーは、まったく逆のことをいっている。自分を愛すること、それが他者を愛することにつながる。自分の価値を認めること、自分自身を知ること、それが

他者への理解につながると。すべては自分から、かけがえないひとりひとりの子どもからはじまる。そしてそのために、幼児教育は決定的な意味をもちうるのである。ベスタロッチー生誕二五〇年を迎える前に、せめてベスタロッチーが望んだ子どもの尊厳の確立だけでも、実現するよう祈らずにはいられない。

(名古屋自由学園短期大学)

〈注〉

鈴木由美子著『ベスタロッチー教育学の研究―幼児教育思想への成立―』(玉川大学出版部)は、平成五年五月に、第四十六回日本保育学会「保育学文献賞」を受賞しました。

(編集部)